

## 見かけは怖いが

### 1. ヒバカリ

近年個体数を減らしてるヘビで、遭遇すれば幸運です。日本で最も小型のヘビで、昭和まではセキセイインコなど小鳥を飼っていると、細かい金網の目でも侵入してきて小鳥を飲みこんでしまったものですが、最近は街中で見かけることがなくなりました。

ヘビの種名には、アオダイショウとかマムシとか、〇〇ヘビと付いていないものもかなりあります。それだけ昔から人との関わりが深かったものと思われま。ヒバカリの名称は、噛まれたら「命がその日ばかり」ということで、毒ヘビと思われていたためだそうです。無毒ですが、おとなしく、そう噛み付くヘビでないためにわからなかったのでしょうか。しかし、つつけば頭を持ち上げて攻撃の姿勢は取ります。



ヘビの活動時刻は種によって異なり、シロマダラのように夜行性のため打吹山に生息していても人目につかないものもありますが、ヒバカリは早朝と夕方が活動時間ですので、この時刻に散策される方には出会いがあるのではないのでしょうか。



椿の平、相撲場上で数回成体を見たことがあります。細長い感じのひも状のものが目についたら側へ寄って見ましょう。両側の口角から首の上にかけて白い帯が見えたら本種です。そっとしておいてやってください。

### 2. ツチアケビ

藪の中に出現しますので目に付きにくいところもありますが、まるで赤いソーセージがたくさんぶら下がっているかのような高さ数十cmもの房ですからギョッとします。薄暗い場所に真赤で柔らかく美味しそうな物体が存在します。しかし、匂いは何ともいえず、口にする気はしません。種子の運び屋は何者でしょうか。マムシグサのような腐敗臭のする花の花粉運搬者がハエという例がありますが、ツチアケビのぼつりした果実は、いかにも食べてくださいという感じ。何でも食べるタヌキでしょうか。京都大学の研究グループは、ヒヨドリなどの鳥が食べていることを観察し、動物による種子散布をするラン科植物として世界最初の報告をされています。従来、ラン科植物は小さなホコリのような種子を風で散布すると考えられていたのです。みなさんの観察報告も期待しています。



ツチアケビの果実



ナラタケ

ツチアケビは、生木の根や枯木に寄生するナラタケの栄養を奪って成長するラン科の植物で、光合成を必要としないため葉がありません。そこで薄暗い場所でも生育できます。開花結実に必要な栄養を根茎に貯めることができたとき、花茎のみを地上に出します。打吹山では、ナラタケが落葉広葉樹に発生することが多いような感じがしますが、ツバキなど常緑樹でも見られますので、菌糸は全山に広がっていると思われます。従って、ツチアケビはどこにでも出現可能です。スギ林でも見ました。

(倉吉博物館専門委員 國本洗紀 2021)